8

鍵盤に魔法を

調律師 鈴木均が語る

修業時代❷

道具作りが思わぬ武器に

一時は調律への意欲を失いながらも、東京の楽器商社の研修に行くと、みんなかんかんがくがくで技術論を交わしていました。調律のことでこんなに燃え、つばを飛ばしながら話す世界があるんだと知り、刺激を受けました。

もう一般家庭のピアノブームは過ぎていましたが、全国でホール建設が計画され、スタインウェイなど高級ピアノが導入される新たなブームが来ていました。そんな時代背景で、全国から「我こそは」と若者が無給でコンサートチューナーを目指して学びに来ていたのです。もう少し一生懸命やってもいいかなと、名古屋で仕事をしながら手弁当で通うことにしました。

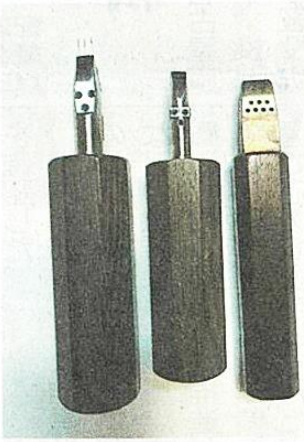
当時、その楽器商社には「神さま」と呼ばれる人が2人いました。仕事を見せてもらうことが学びの第一歩。「あいつならそばにいてもいい」と思われる関係づくりを模索しました。

調律には150種類くらいの道具がいるのですが、やる気のある人ほど工夫して、市販品ではない道具を持っていることに気づきました。僕は木工が得意なので、見ただけで彼らの作った物より上をいくものが作れる自信がありました。

工夫して作った道具を仲間内で見せると「俺にも作ってよ」と頼まれ、出来栄えが評判になり、うわさを聞いた2人の神さまからも頼まれるようになる。さらに「ここをもうちょっと」というような細かい要望も受け、渡す前に自分で使ってみると、手の動きや力の入れ方などがリアルに分かってきました。言葉で伝えにくい微妙な勘どころ、本当は教えたくないことも教えないと良い道具は作ってもらえないわけだから、これは勉強になりました。

調律師にはピアノがうまい人、音楽に詳しい人、英語やドイツ語が堪能な人などいろいろなタイプがいて、みんなが同じ能力を求められているわけではありません。僕には「器用」という能力が役に立ったのです。

（聞き手・南拡大朗）



弦をたたくハンマーのフェルトに刺して音色を整えるピッカーという道具。金属部分も含めてすべて自作した

中日新聞朝刊 2024.10.12 掲載記事より